慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古代末シリア宗教史研究(一)
Sub Title	A study of the religious development in Ancient Syria (I)
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1964
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.37, No.2 (1964. 8) ,p.85(201)- 107(223)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19640800-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古代末シリア宗教史研究（一）

小川英雄

（一）序

ヘレニスティク時代以後のシリアの宗教史は、既成のペルシァ的・セム的な宗教文化[1]に加えて、更にギリシァ系の宗教文化の作用によつて非常に複雑な様相を示した。そこには元来土着の神々の他に、長期にわたりこの地に定着運動を行つていたアラビア系諸民の神々があり、両者は相互に密接な関係を結び、シリアの宗教生活を変容させたが、他方では征服民、即ち、アレクサンドロス大王の前に来たペルシァ人とそれにとつて代つたギリシァ人とが、それぞれの立場から神観念や宗教的な生活態度に影響を与えたのであつた。又、ディアスポラのユダヤ人の宗教がシリア各地（例えば、Palmyra）で与えた作用も考えなくてはならない。こうした宗教上の運動の背景として、東西両世界の十字路に位置するシリアが経済的に繁栄し、アレクサンドロスやその将軍たち――とりわけ Seleukos Nikator による都市化政策によつて出来た諸市の多くが、もともと現地人がつくつていた町々と共に急速に発展したことがある。シリア沙漠周辺の荒地は新に灌漑され、農業生産を開始し、遊牧民の定住化や外国人の移民等により人口も増大した[2]。一方では、このような十字路的位置にある土地につきものの政治的社会的不安定（ユダヤ人・シリア人等土着民の叛乱に加えて、パルティア人・アルメニア人・アラビア人・ローマ人の侵入、セレウコス朝とプトレマイオス朝の間の争い等々）があつたが、

それはシリアの地の繁栄をすぐに崩してしまうと云うものではなく、逆に諸外来要素の社会的文化的な混合と醗酵を促したのであつて、宗教上でも著しい昂揚が見られることになつた。本稿の目的は、ヘレニスティク時代のこうした宗教的昂揚の有様をシリアの各地について研究することにある。

古代末のシリア宗教の中から、後世にも知られるようになつた大きな宗教運動の大部分が現われた。例えば、ユダヤ教の新発展、特にタルムード文献や死海のクムラン宗団の信仰、キリスト教及びその偉大な異説（ネストリウス派、アリウス派、単性論者等）、又シリアの地が媒介となつた例としては、ペルシァ宗教の新発展（マニ教やゼルヴァニズム）やイスラーム等がそれである。しかし、これ等だけが当時のシリア宗教のすべてでもなければ、又、これ等が突然に現われたのでもなく、その背景にはこれ等の神学的に高等な教説が出現するとそれを支えるに足るだけの宗教的感激が、上記のような社会的文化的状態の中でたかまつていたのである。一九世紀の進化説とは別の意味で、例えばキリスト教がひろがる前にヘレニズム世界にキリスト教をうけ入れ得る精神的状況がつくられたことを進化と云つてもよいとすれば、[3] この当時のシリアの宗教は高度に進化した一つの精神状態をあらわすと考えられる。従つて、そうしたシリアの精神的状態とその由来について調べることが必要なのである。ところが、古代シリアの宗教については、まとまつた史料が少いため、総合的な判断はなかなか困難で、F. Cumont もその著 "Les religion orientales dans le paganisme romain" の第二版（1909）で最も多く改訂した部分がシリア宗教についての章であつて、その際シリア内陸の諸部族の分立した集落の状態を反映する、同じく分立した宗教の状態は史料不足で未だ捉え難いと述べていたほどであつた。その後、古代シリア宗教史については、雑誌 *Syria* の発刊（1922）をはじめ、シリア諸都市（Dūra-Europos, Palmyra, Seeia, Bostra, Petra, Hatra 等）の考古学的発掘によつて多くの研究が発表されて来た。そしてその結果、内陸シリ

アのヘレニスティク時代の宗教史がかなり分るようになつた。

現在のシリアは、トルコ・レバノン・ヨルダン・イラクにかこまれた一小国家の呼称にすぎないが、古代の地理上の用法ではもつと広い範囲を示している。即ち、Polybius (V, 80, 3) や Josephus (BJ, IV, 662) によれば、シリアの南端はパレスティナとエジプトの境界近くの Raphia であり、又 Strabo (XVI, i, 2) によると、北方ではキリキアからコマゲネやユーフラテス河沿いの諸地方まですべてがシリアに入り、カツパドキア人も Leukō-Syroi (白いシリア人) と呼ばれ、ローマ時代初期にはシリア総督の下に置かれていた (Josephus, BJ, I, 538)。更に、アラビア半島方面に対してはナバテア王国の首都 Petra の東南にあつて、同半島からのパレスティナへの隊商路の入口に当る Ma'an のあたりまでがシリアであつた。(4)

このように、ユダヤやフェニキアやトランスヨルダンを含めて地中海東岸の広い地域がシリアと考えられたことが分るが、地形上から見るならばそれは当然のこととも云えるのであつて、まず紅海・アラバ凹河・死海・ヨルダン河と云う南北に走り、死海周辺では海面下になるほど深い地峡がこの土地の性格を決定し、その東側はシリア沙漠に面し、又西側には地中海との間を山脈が遮つている。土壌は火山性で一般に南方へ向うほど乾燥して農耕に不適となる。北方にはレバノン山脈のあたりに肥沃な平野があり (Antiochia 市北辺の 'Amuq, Coelē-Syria の Beqa, Haurān 地方の Nuqra 等)、オリーブ・ブドウ等の地中海性の産物をはじめ大小の麦など土地の人口を養うに足りる産額を示していた。

このような縦割りの地形に古来様々な部族アモル人・カナーン人・ヘブル人・アラム人・アラビア人等) が時期をちがえて入植すると云う歴史的に複雑な過程を経たために、全シリアの政治的統一は決して完成されず、古くからオリエントの諸帝国の支配下につき、又その遠征隊の通路となり、ヘレニスティク時代にもそれは変らなかつた。これはシリ

アが交通上の要衝にあつたためであるが、このことは同時にシリア周辺の地域に交易の結接点を生み出し（Palmyra, Damascus, Hamath, Boṣṭra, Ma'an等）、それ等の地域から更に南北に走る地域や山脈の切れ目をぬつて、交易路が地中海岸にまで達していた。(5)

このような構造の土地に於いて、人々が精神的に大きな衝撃を受けて、何等かの新しい動きを生じて来る背景としては、第一に東西交易が活動化してシリアの沃地が経済的社会的に繁栄し、第二にその繁栄した状態が沙漠の遊牧民の生活に大きな変化（例えば、定住農耕生活への変化）をひき起すことが考えられ、その結果、こう云う相異つた生活形態とそれ等が持つ諸観念の混合によつて、物質・精神両生活面に新しい理想が生じてくるのであろう。そして社会の豊さは有名・無名の神学的思索を生み出し、異国のすぐれた文化（ヘレニズムやイラニズム）が受容される。そして、ギリシァ人による征服以後のシリア宗教史の課題は、(イ)征服や商業による交流が遠い土地との精神的交流をともなつたことの検証、(ロ)シリアにおける土着の諸民の発展が新しい宗教的昂揚を生み出したことの検証、(ハ)上の二つの現象が綜合されて、新しい福音と神学とが生じて来たことの検証、以上三つとなる。この中で、まず(ロ)を取りあげたい。外来の思想をうけ入れるに十分な精神的な高さにまで土着民の心が上昇していないならば、入つて来た思想は何等人々に新しい境地を悟らせることがないであろう。しかし、上述の通り、ヘレニスティク時代以後のシリアには複雑でしかも密度と普遍性のある精神的な渦動があつて、後世の宗教にとつて重要な出発点となつているのである。そして、ヘレニスティク時代におけるシリアの土着民の間で起つた最も大きな社会的発展は、沙漠周辺の民のシリア沃地への定着であり、私はその現象について不充分ながら稿を重ねて来た。(6) こゝではこの定住運動を背景として、神観念や祭祀がどのような様相を呈したかを具体的に考察しよう。

（二）Dūsarēs 神崇拝の進化

Dūsarēs 神は、ヘレニスティク時代にシリアに定住したアラビア系民族であるナバテア人の主神として知られる。しかし、当時中部アラビアにいたと云うサラメア人（Salámioi＝SLMY）もこの神を信じていたことを示す碑文が Hegra から出ているし[7]、同地のダカレネ人（Dacharēnoi）も Dūrarēs 神を拝していた[8]。従って、Dūsarēs 神信仰はナバテア人だけのものではなく、中央アラビア以北に於ては、かなり超部族的な性格を持っていたことが分る。ナバテア人が特に問題となるのは、この人々が定着運動の中心をなし、アラム系の言語による碑文の史料を多く残したからに他ならない。更にもう一つ注意すべきことはどう云う形で礼拝を行っていたにしても、記録（碑文及びテキスト）によれば、ナバテア人等は Dūsarēs 及び後述する Allāt の二柱の大神の他にも尚大小の男神女神（Hobal, Manat 等）も崇拝していたことであって、恐らく排他的・絶対的な一神信仰はなかったであろう。

（A）神名について。　Dūsarēs 神の名前は文献史料にも出るのであって、既に初期キリスト教の著作（Euusebius; Tertullianus）に[9]現れる。又、ビザンチン時代の辞書編纂者たち——Stephanus Byzantinus, Suidas, Hesychius 等がこの神の名前をあげている[10]。しかし、この語の正確な意味が問題にされたのは一九世紀前半に文献学やセム学が発展しはじめた時からである。

初期の研究者たちの主張は J. H. Mordtmann, F. Baethgen, G. Rösch[11] 等によって要約されている。それ等によると、すべての研究者の一致している点は Dūsarēs とは、碑文に出る Du-Shara（DYShR'）なるアラム語の複合語のギリシァ語形であり、Du は所有者・主人（maître）を示すから、全体は「Shara の主」を云うことになる[12]。一方、

Shara については、初期の研究者たちの間ですでに見解が分れてしまい、M. A. Levy, Pococke, de Vogüé をはじめとして、現在までに Wellhausen, Dalman, Th. Nöldeke, Domaszewski, A. Grohmann, R. Dussaud, F. Cumont, G. A. Smith 等は地名と考えた。それに対して Krehl や F. Bathgen はアラビア語の解釈から、太陽熱（ShRY）であるとし、Movers は火と考えた。しかし、地名説以外は二〇世紀になつてからは殆んど主張されていない。

地名説は、（一）普通名詞説と（二）個有名詞説に分れる。Nöldeke[14] や Wellhausen[15] は（一）の立場で、例えば、前者は Shara は「オアシスとそのまわりの灌木のしげみ」と考えた。又、G. A. Smith はこれとは逆に、「大気と太陽にさらされて乾燥した土地」を指すと主張した。[16] これ等に対して、最初に Stephanus が記した通りに（Dūsárē skópelos kai kolyphē hypsēlatatē Arabias…apò tū Dūsárū）、Dūsarēs と云う神名に由来する名前を持つ高山がアラビアにあつたと考える Dalman[16] をはじめとして、Shara は特定の山を指すとする者が多い。即ち、Pococke, Levy,[17] Grohmann,[18] 更に F. Hommel, R. Dussaud 等は Petra（Sela：O. T.）の近郊の山地 ash-Sharaʿ 又は esh-Sherât（海抜 5000 フィート）がこの神名の源であるとした。[19] 現在では、この種の確認問題に極めて保守的な態度をとる Sourdel[20] さえも認めているように、Levy 或は de Vogüé[21] 以来の Shara 山起源説が一般的と云えよう。それ故 Dūsarēs を「Shara 山の主」と訳すことは正しいと思われるが、これは副称（Epithet）の一つにすぎず、真の本名はなかなか分らず、ヘブル人の Yahweh ようにテキストからは全く隠されていた。しかし、この点は一九世紀末から二〇世紀にかけてシリアの Haurān 地方及び Hegra（Medaïn-Saleh）で発掘された碑文によつて解明されるに至つた。

（イ）Haurān 地方の Imtān 出土。「…Boṣṭra にまします、我々の主人（ナバテア王を指す）の神なる Dushara A'rā に（l. 5–l. 6.）……」[22]（93 A. D.）

（ロ）Haurân 地方南部の Umm idj-Djmal 出土の二語碑文。「ここに Dushara [A'rā] のための聖なる石あり、'Awīdhā の子 Māsik の作。」[23]（ギリシァ語の部分は "Mase-/chos A-/ūeidanū Dūs/arei A-/arra."）これは Dūsarēs 神の本名がギリシァ語で現われた最初の例である（西紀一世紀末—同二世紀初）。

（ハ）Haurân 地方の Bostra の碑文。「…Dushara A'rā にささぐ（l. 2–l. 3）…」[24]（148 A. D.）

（ニ）Hegra 出土。「…Bostra にまします Rabbel（人名）の神 A'rā に（l. 2–l. 3）…」[25]（101 A. D.）

これらの碑文によつて、Dūsarēs 神の本名として A'rā（NTYN）が認められるようになつたが、（イ）の Imtân の碑文の読みには異説が可能で Dushara と A'rā の間に wäw を読み、「Dushara と A'rā」として、A'rā も又副称の一種である、と主張したのは Lidzbarski である。即ち、a'rā はアラビア語（ġaḍir）から「豊富」を意味することが分るから個有名詞ではない[26]、と云う。しかし、大多数の研究者は今でも A'rā こそ真の神名であると認めており（例えば、Sourdel[27]、Dussaud はこの二つの名前の関係について、上記のように Petra 近郊の半定住地帯の Shara 山地を中心とする地方的大神が A'ra であつて、そこに入つて来た遊牧民たちがこの神が当地の主であると聞いて、「Shara 山地の主」と称し、半定住の生活の守護神（生育の神）として崇めた[28]、と述べている。

一方、ペルシァ王 Cambyses（529–522 B.C.）のエジプト遠征に関連する記事の中で、Herodotus はパレスティナ南部のアラビア人の宗教に触れて、この人々は「Dionysos と Ūraniā しかないと信じている… Dionysos を Orotalt, Ūraniā を Alilat と呼ぶ」（III'8）と書いているが、長い間謎であつた Orotalt-Dionysos が上記の A'rā の発見によつてほゞ満足な説明が得られることになり、Dūsarēs 神の歴史を西紀前六世紀にまでさかのぼらせ得ることになつた。即ち、この Orotalt は難物で諸説が提出されて来たが[29]、いずれも一般に認められなかつた。その中で A'rā が Orotalt

(variant. Orotal) と同じであると云い出したのは、第一に Clermont-Ganneau であり、次に M. Lidzbarski[30] が、ナバテア人と同じころに Haurān 地方に定着したサファ人の神 Rudā や Palmyra などアラビア系のシリア都市に知られた Ardu, Arsu などの神々と結びつけて論じたのである。[31]

（B）神性について。　以上によつて、Dūsarēs 神の名前の由来が分る。即ち、少くとも西紀前六世紀にまでさかのぼり得る古い神であつて、ナバテア人ばかりでなく、シリア沙漠周辺の他のアラビア系諸民によつても信じられ、とりわけ Petra の近くの Shara 山が信仰の本拠であり、その付近は遊牧民の半定住地、即ち半農半遊牧の生活の場所であつた。次の問題は、Dūsarēs 神の本性であつて、これはその神を信じていた人々の生活とより密接に結びついている。

Dūsarēs 神の本性を示すテキスト史料のうち、最も古いものは上に挙げた Herodotus であつて、そこにこの神が Dionysos であると記されているのはなぜだろうか。当地で Cambyses の軍隊がアラビア王に出会つた時の様子を見ると、かなりの灌漑が行われた形跡がある（III, 9. 但し、Herodotus 自身は信じられないと述べている）。この地の灌漑の歴史はペルシァ時代のはるか以前にさかのぼり、数次の定住運動とその度毎の灌漑農耕の実行が確認されている。しかし Herodotus は更に当地の地中海岸の町々を北から Kadytis, Ienysos とあげ、Kadytis より北にはシリア人が、それと（F. Hommel が Dionysos 神崇拝と関係ずける）Ienysos の間はアラビア人が、Ienysos から Serbonis 湖の間は再びシリア人が支配しているとし、第三の地帯は全くの沙漠地である（III, 5）としているくらいなので、恐らく農耕生活の規模はとるに足りないものであつたろう。しかし、当時と同じくらい、或はそれ以上の荒廃の状態にあつたと思われる今世紀前半の、死海南端からアカバ湾までの風土に関する報告は、そこにも様々な生命が息ずいていたことを示

している。G. Horsefield,[33] G. L. Robinson[34] 及び M. A. Murray[35] の記すところを要約すると次のようになる。Robinson は、旧約聖書のエドム人のいたこの土地の中央に位置して、死海と紅海をたてに結び峡地であるアラバ涸河並びにその両側と云う三つの部分に分けて敍述している。第一に西方の Negeb の高地は、全く水分に乏しく、（諸涸河には一一月～三月に水が流れる）山は低く海抜三〇〇〇フィート以下であるが禿山である。土地は石灰岩が沙礫をなし、不耗である。北部ではやゝ条件がいい。第二に中央のアラバ涸河は巾約一〇マイル、長さ約一〇〇マイルの地域であつて、砂地の荒野であり、侵蝕された石灰岩、斑岩が点々としている。それに対して東方の山地は高度三五〇〇～五四〇〇フィートであつて、上出の esh-Shara 山地を含み、Ma'an 市をはじめ、Elji, esh-Shobek, el Buseira, Tafile 等の集落及びそれ等の属する諸涸河の周辺には、果実のなる樹木、樫、松、柏、ポプラ等の木々が見られ、又とりわけ死海南端の東側にある Hesa 涸河のあたりや Petra の東二マイルの地点にある Elji は、肥沃で穀物がよく実り、ブドウは Ma'an の市場で売り出される。そして、その上につけ加えなくてはならないのはこれ等エドムの土地の全体にわたつて、多孔質の石灰岩からにじみ出てくる地下水が泉水をつくつていて、[36] それ等の土地は春になると貧弱ではあつても牧草地となり、所々で穀物を産し、半農半遊牧の民（fellaheen）が自給自足の生活を送る。

このように見ると、Orotalt-A'râ 神は植物の生育を司る Dionysos 神として、エドムの土地で最も生産力のある esh-Shara 山地に鎮座して、アラビア人に恵みをたれていたものと考えられよう。次にこうしたアラビア人たちのシリアへの定住化運動が明白に現われたヘレニスティク時代以後の古代末の史料に出てくる Dūsarēs-A'rā 神の本性を考察しよう。

古典文献及び碑文には、この神の本性を太陽神（"solar"）とするものと、Dionysos（"bacchic"）とするものとが

あつて、長い間研究者たちは両者を調和させようと試みて来た。

まず、太陽神を本地とする説があつた。上述の通り“Shara”なる語の語源から、太陽の恵み深い熱や光がこの神の崇拝の本体であると考える人々が特に一九世紀に多かつたが、その他の証拠としては次のようなものが存在する。（イ）Hegra で発見された墓地の碑文[37]（西紀後一世紀）に、「昼と夜との間を分つ御方が（この墓所を）廃棄する者をそれが誰であれ呪われることを」（l. 4–l. 5）とあり、これについて S. A. Cook[38] 等は当碑文の「昼と夜との間を分つ御方」を Dūsarēs 神の太陽としての称号として認めている。しかし、この解釈には異説が多く、Guidi[39] のように、旧約聖書・創世紀（I–5）の記述（「神は光を昼と名ずけ、やみを夜と名ずけられた。夕となり、また朝となつた。第一日である」）と結びつけて、この称号にはユダヤ系の考え方が作用していると主張するもの、Lidzbarski[40] のように、上記の Orotalt と金星崇拝の神 Ruḍa との語源的結合から、この称号は宵の明星・暁の明星としての金星である、と云うもの等々がある。Dūsarēs の名が出ていない以上、Sourdel がこの神が本来の、Dūsarēs 神であるかどうかを疑うのは当然である。（ロ）Haurân 地方の Sūweida から出土したギリシァ語の奉納碑文。「……不敗の神たる Dūsarēs の祭司……athasm……が建立した。」[41] ここに現われる不敗者 Anikētos（＝Invictus）は古代末に非常に流行した一神教的太陽崇拝の太陽の副称号と同じものなので、J. H. Mardmann や F. Cumont は Dūsarēs の太陽神的性格を示すものと認めたが、Sourdel は懐疑的で、この称号は太陽神以外にも与えられたとする。[42]（ハ）Strabo は Petra 市の宗教について、「彼等は太陽を崇拝し、家の上に祭壇を設け、そこに毎日水を注いで清める」（XIV, iv, 26）と述べたが、この太陽（hērios）を Dūsarēs 神と同一視する通説に対し、Sourdel は再び否定的であつて、この記事の性質は太陽説の史料としては不充分なもので、本当は祭祀の様式を示そうとしたものである、と主張した。[43]（ニ）Petra の考古学的研

究者である G. L. Robinson はそこに見出される若干の遺跡について、太陽崇拝の痕跡を認めた。[44] 即ち、Petra の「高きところ」にある円形祭壇（円形の上面に二重のまるいくぼみがほられている。深さは外側の円が三インチ、内側が六インチ）をアラビア人の太陽崇拝の証拠とし、又 Petra 市内で対になって立っている石柱を、日の神 Dūsarēs と月の女神 Allāt であると考えた。

以上の諸史料は後述する Dūsarēs 神の Dionysos 性の証拠と比較する時、はなはだ貧弱であることが分る。又、大地の生育神と天の太陽神とは機能上密接な関係にあるとは云え、Herodotus 及び碑文によって確認された Dūsarēs-Orotalt 神の Dionysos 性から考えるならば、少くとも早期に Dūsarēs 神が明確に太陽神の性質を持っていた、とは信じられない。それ故、一九世紀以来この神の太陽神としての面だけを主張する研究者は一人も出なかったのは当然で、Sourdel 以外の人々は太陽神としての性質（"solar"）も認めた上で、Dionysos 神としての性質（"bacchic"）とを調和させようと努力したのである。次に、まずDūsarēs 神の Dionysos 的な側面を示す史料を見よう。（イ）既に引用した Stephanus Byzantinus の中で Isidorus Characenus は「ナバテア人の Dionysos である Dūsarēs 神[45]」と記しており、ローマ帝国初期に Dionysos 的な性格が認められていたことを示している。（ロ）Alexandros 大王のアラビア遠征計画に関して、Arrianus (96–180 A. D.) は、Alexandros は「アラビア人たちが Ūranos と Dionysos の二柱だけを神として崇拝すると聞いたそうである」(Anabasis Alexandri, VII, xx, 1) と述べているが、この Dionysos は上述（六七頁）の意味での Dionysos-Dūsarēs であると思われる。[46]（ハ）Origenes は「アラビア人たちは Ūraniā と Dionysos だけを神として崇める「(Contra Celsum, V, 37) と記しているが、この Dionysos も同様である。更に傍証として、ローマ帝政時代の Haurân 地方で Dūsarēs 神信仰が著しくなったことゝ、それにつれて Dionysos

の名が記録に瀕出することが次のように挙げられる。第一は、Dūsarēs 神の古銭が Provincia Arabia の主府である Haurân 地方の Bostra で、Hadrianus 帝から Elagabalus 帝の時代にかけて多数鋳造されていたことであつて、その銘文には AKTIA DOYCAPIA, DOYCAPIA, ACTIA DVSARIA[47] などとある。これは Dūsarēs 神の祭事を表しており、Cumont は Haurân 地方の Sūeida の町のギリシァ語碑文「Soada の町人の祭が八月三〇日に神に奉納される」[48]を引用して、八月末のブドウの収穫の開始を祝う Dionysos 神の祭が当地方で行われ、地方的な競技会が催された、と考えた。そのことは、西紀後二三一年に Sūeida 市が Dionysias と改称されたと云う Damascius の記事によつても明白であろう。[49] 又、他の古銭としては、Gallienus 帝の時に ΔΟΥCΑΡΗC ΘΕΟC の銘のあるものが知られるし、[50] Sourdel と Cumont の集めた人名に Dūsarēs 神が出る例を枚挙すると、Batanaea の Oumm el-'Osidj の Abdadūsarūs（ギリシァ語畧）、Bostra のキリスト教徒の二つの碑文、Transjordan の Khirbet Ader の碑文及び、Dūra-Europos の碑文にそれぞれ Dūsarios（ギリシァ語畧）、Macrobius (I, vii, 2) に Petra 出の哲学者として Dusarius, 更に Boṣṭra の碑文に Taim-Dūshara 及び 'Abd-Dūshara（アラム語畧）、Mūseifirē のギリシァ語碑文に Theimodūsarūs 等々かなりにのぼる。[51] 次は、ブドウのモティーフにかかわる遺物が多いことであつて、一九〇九年に Butler が Haurān 地方の聖地 Seeia の Ba'al-shalmīn 神殿の境内にある一とまわり小さな神殿及びその付近から Dionysos 神の姿をとつた像を発見し、この小神殿は Dūsarēs 神のものと推定したが、[52] これは一般に認められている。Dūsarēs 神の美術については碑文によつても、実物によつても明確には何も分らないと云う Sourdel も、それを Dionysos としてのこの神の性質を示すものと考えている。[53] 又後述するように、Dūsarēs 神が当地方で、上記の Dūsarēs 神殿の推定年代である西紀後一世紀には擬人化されていたことも重要である。その他にヘレニスティク時代

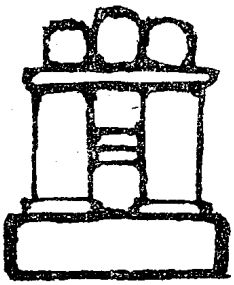
の Petraの「高きところ」からブドウの葉のかなり様式化された図柄をもつた陶片が多数出土しており、Murray 等は Dūsarēs 神への奉納用のものであろう、と推定し、又種々な形式の浅い鉢のうち、糸底のない内部彩色のものは祭祀用であつて、使用後直ちに破壊されたと主張した。[54]

以上の諸記録は Dūsarēs 神の Dionysos 性を証明するに足ると思われるが、その場合 Herodotus の Orotalt 時代のような貧弱な植物生育の風土を考えることは誤りであつて、パレスティナ南方ではナバテア人の定住以来熱心な灌漑農耕により、高度な生産性が達成され、[55] 例えば Strabo (XVI, iv, 26) に描かれている通り、西紀前一世紀の Petra は農産物の生産がかなり豊かであつた。そこは、現在のように見棄てられた土地ではなく、ブドウ畑もあり、その他の果実——Robinson の推測では樫、松、夾竹桃、オリーブ、無花果、アプリコット、リンゴ、アーモンド等——を産し、その他ネゲブ地方やトランスヨルダン地方も灌漑により、豊かな産物（穀物及び果実）があつた。[56] 史上、パレスティナ・カナンの地をめざす遊牧民の定住運動は、ヘブル人のようにまずネゲブ地方に到る場合と、アラム人のように Haurān 地方に来る場合とがあつたが、ヘレニスティク時代のアラビア人はその両方に進出し、上記の南部に定着したばかりでなく、より豊かな「シリアの蝶番」とよばれる[57] Haurān 地方にも西紀前一世紀の間に侵入した。死海の東北、Damascus の南方に位置する Haurān 地方は火山性の土壌であるが、その最もすぐれた定住地は Djebel Druze と云う高地（古代の名称は Auraneîtis）で、岩石はよく風化されて農耕に適し、又、高度（1,800 m）がノマドたちの略奪から定住生活を保護してくれるので、古代においても、そこは小麦等の必須食物の豊庫であつた。ヘレニスティク時代のアラビア人たちもこの地の Nuqra と云う豊かな平原を確保したのである。このような背景から考えて、Dūsarēs 神の生育神としての働きにも大きな変化があつたと考えなくてはならない。Herodotus 時代の半農半遊牧の生産性の低い社会か

ら、豊かで生活の保障された文化的な定住社会に変れば、Dūsarēs 神の司る生産力も拡大され、高等な定住農耕全体の支配者となつたと考えられる。このような変化は、歴史史料として Dūsarēs 神の崇拝史にどのように現われているだろうか。

（C）Dūsarēs 神の変態

Dūsarēs 神の貨幣（上出）のうち、Boṣṭra と Adraaから出た Caracalla (211–217 A. D.), Aemilianus (253 A. D.), Philippus (244–249 A. D.), Decius (249–251 A. D.) のものには、特有の図像が刻印されている。即ち、何かの器具又は特に祭祀用具を思わせる三部分からなる物体であつて（別図）、この解釈は重要な問題を含んでいる。最初に de Saulcy や J. H. Mordtmann[58] がこれをブドウ圧搾装置（"pressoir"）とその上にのせられたブドウ酒の三つの甕であると主張した。もし、その説が正しいとすれば、銘文（ΔΟΥCΑΡΗC ΘΕΟC）によつて Dūsarēs＝Dionysos の同一性の証拠となるのであるが、R. Dussaud は一九〇四年に反論を発表し[59]、これは祭壇上にのつている三つの "baityālia"（「聖なる隕石」）であつて、後述する Petra の方形の石の祭壇と同じ意味の、Dūsarēs 神の鎮座する石偶（或はこの神自身）であると述べた。Sourdel も Dussaud 説に倣い、Haurân 地方の他の場所（Boṣṭra の南数時間のところにある el-Oumta'iyyé 出土の楣の装飾とか、Der'a の近くの 'Ain el-Meisari の祭壇の正面の装飾）で見出される同様の図像を引用して、"baityālia" 説を採用した[60]。しかし、C. R. Morey は一九一三年の論文で de Sauley の説を再びとりあげて、Dussaud がブドウ圧搾装置説を否定したのは、Dūsarēs 神とこの器具とを同一視しようとしているかのように誤解したためであつて、この器具は Dūsarēs 神の象徴にすぎないと主張し、Petra では石偶であつた Dūsarēs



神の表象の地方的差異について、次のように述べた。[61] 即ち、Commodus 帝の時のブロンズ貨幣に BOCTPHN WN4-OYCAPHC（「Bostra 人の Dūsarēs」）なる銘入りのものがあり、そこに王冠をかぶったこの神の像が刻印されているが、これが Dūsarēs 神の擬人像の最初のものである（但し、西紀後一世紀以後と云う以外には年代不明のものでよければ、上記の Seeia の Dūsarēs 神殿出土の像がある）。そして、Bostra のようにローマ属州の首都で打たれる貨幣に神の姿が古いセム的な石偶崇拝を脱した形であらわされるようになったのはごく当然である。ところが、Dussaud の "baitylia" が現われている貨幣は Commodus 帝のものより後世に属するのに、そこに再び旧式の神の表象が見られるとは不可解であって、むしろローマ統治下にますます繁栄するシリアの豊かさを示すものとして、Dūsarēs 神の象徴であるブドウ圧搾装置をそこに見た方が適当である、と云う。この Morey の説明は、第一に古銭上に見られるその「装置」が当時或は現在使われていることが示されなくては信じられないし、又第二に宗教においては同時代の図像或は観念に、より古いものとより新しいものが同時に存在することも出来、或はより古いものが一時的に外来の新要素の一部を押しのけて復活することも可能である以上、Dūsarēs-baitylos が Commodus 帝以前にだけ存在し得たとは云えないであろう。しかし、当該器物が Morey の云う装置でないとは断定出来ない。原住民の生活の背景を考えるならば、その程度の神の表象の変化はあり得るからである。現在までのところ、この問題の解決はついていないが、Dussaud も Hauràn 地方の円頭（Omphallos 型）の "baitylos" と Petra にあったと云う後述の方形で、人工を加えてない粗石の "baitylos" との違いは認めている。

そこで Petra における石偶崇拝の史料を調べ、次にこのちがいの由来についての説明を記そう。

考古学者たちの描く Petra の宗教生活は、さながらこの町全体が石偶崇拝の巷であった如き観を呈する。勿論、パ

レスチナの過去一世紀にわたる発掘は所謂“Semitic litholatry”と呼ばれる種類の信仰について、多くのことを明らかにして来たが[62]、Petra でもエドム人の時代からこの種の信仰が盛大であつた[63]。ヘレニスティク時代にもこれは維持されていたのであつて、Horsefield は墓地（例えば、市の墓所である Mu'eisra と云う岩山の墓室の背面の壁には三つの石偶が Dūsarēs 神の表象としておさまるための壁龕が見られる）、個人の家（Murray の調査した洞窟内住居の入口には二・五インチ口径の穴（cup-hole）があり、神としての石柱がかつてはそこに安置してあつた[65]）等々殆んどあらゆる住民生活の場に石偶があつた、と云う。特別の聖所の石偶崇拝については、Robinson が Dūsarēs 神について二、三の例を挙げている[66]。その一つは Petra 市内に通ずる隘路 Sîk の入口（Bâb as-Sîk）に二〇～三〇フィートの巨大な粗石の方形の塔があり、これは Dūsarēs 神の象徴又はその神の祭壇である。又、Sîk の途中に Dūsarēs-baitylos をまつつたらしい一〇ケ所の壁龕のある場所がある、等々である。これ等の考古学的推測がどの程度信ずべきものであるかは確言出来ないが、最も大切なのは有名な「高きところ」の祭祀であつて、そこには約一〇〇フィートの大石柱（“mazzeboth”）があり、これは Dūsarēs と Allāt と云う一対の主神を示しているとされる[67]。更に。同所の主祭壇の中央のへこみには Dūsarēs 神を表わす方形の粗石がはめ込まれていて、そこに犠牲獣の血が注がれた[68]、と考えられる。上記の諸例は直接の文献的裏付を有するものではないが、最後のものは Petra のアラビア人の祭祀としてかなり有名であつたらしく、Suidas[69]（S. V. Theusárēs）にアラビア人が Petra で方形の黒い自然石の Theusárēs（＝Dūsarēs）神に血の犠牲を捧げる、と書いてあるのは、この「高きところ」の祭壇上の儀式を指すと認められる。即ち、この石が Petra の Dūsarēs 神崇拝の中心であつて、「Shera の主」はこの岩山で儀式をとり行われたことになる。

このような“baitylos”崇拝は Haurān 地方のような開化された社会の入口で、比較的後世になって崇拝された Dionysos とは、異った面を持つのは当然であろう。それは時間的相違と地域的相違とを併せたようなちがいであって、よりアラビア奥地に近く、より古くから（既に西紀前三一二年に）ナバテア人によって定着されていた Petra の古い生活の相と、その反対の Haurân 地方のそれとが、神の働きにも差異を生じさせたと考えてもよいであろう。従って、Petra の Dūsarēs 神は Herodotus に出た Orotalt 的な Dionysos 神（遊牧民或はエドム人の石偶崇拝の神）であり、Haurân 地方のはより古典的な（沃地の豊饒神としての）Dionysos 神であったと云えよう。

この石偶崇拝の変遷史は既述の Dūsarēs 神の二つの性質（“solar”と“bacchic”）の問題に関係している。即ち、史料的にやゝあいまいな太陽神としての性格を認めるか否か、認めるとすれば、歴史的にどこで Dionysos 的なものと結びつけるのか、と云うことが起って来る。この点に関する諸説は次のように分類される。（イ）Sourdel のように太陽神的性格を一切否定する者、（ロ）Krehl[70] のように、Dūsarēs 神は多面性を持った（“viergestaltig”）Dionysos であって、太陽の豊かな生命力の一つの現われとも見られるから、この神は太陽とも観じられるとする者、（ハ）Robinson, G. A. Smith, S. A. Cook, G. A. Cooke, J. H. Mordtmann, F. Baethgen, C. R. Morey[71] 等は Strabo の太陽神についての言及を重視し、本地は太陽神であり、Haurân 地方で他の神（Ba'al-shamîn）と習合して Dionysos 神となったとする者（特に、Morey は Petra と Bosṭra の神観念の地域的差異を強調する）、（ニ）E. Meyer, Cumont[72] のように、太陽神的性格の存在を認めるが、それが先行する形であるとは認めず、ローマ帝政期の間に、Dionysos 的自然崇拝が習合（Ba'al-shamîn や Mithra との）によって太陽神崇拝一神教（“solar monotheism”）に吸収された、と主張するもの。

以上の四説のうち、(イ)はかなり保守的であるが、Haurân 地方の実証的な史料に限つて云うならば、きわめて合理的な見解と云えよう。(ロ)の太陽神と Dionysos 神との崇拝の無矛盾性を主張する立場は、甚だ好都合であつても、実は理論的にすぎて、歴史的にその無矛盾性がどう現象したかと云う点には答えていない。(ハ)の太陽神的性格の先行(本地)説については、既に Sourdel が引いた線が十分なもので、もはや考慮の余地がないと思われる。[73] 太陽神としての性格を定住する前の遊牧民の主神に付与しなくてはならないと云う史料的理由は少しもない。(ニ)の立場は古代末の宗教的状況についての Cumont の有名な理論、即ち、当時すべての価値ある神々が太陽神拝崇の唯一神教に吸収されて行つた、と云うものに基づいている。しかし、その問題は Dūsarēs 一神の性格決定の範囲では扱い切れない問題を含んでいる。典型的な Dionysos 神の宗教にまで昂揚したシリアの一宗派の主神に対する信仰が、Cumont が考えたような高度の太陽神崇拝の密儀宗教に接続して行く有様は、この神だけでなく、他の神々についても調べてみなくては分らない。

（未完）

註

(1) R. Dussaud, Anciens bronzes du Louristan et cultes iraniens, *Syria*, 26 (1949), p. 196-229. 参照。ここでは西紀前五世紀以来のシリアにおけるセム・イラン両系統の宗教接触が論じられている。

(2) P. K. ヒッティ著、小玉新次郎氏訳、「シリア」(紀伊国屋書店)に、当時のシリア社会の状態が詳しく記されている。

(3) R. Dussaud, Le monothéisme primitive, *Syria*, 27 (1950), p. 374. ここで Dussaud は Raffaele Pettazzoni が当時 Bruxelles で開かれた宗教学会で、一神教の形成について述べた意見に言及し、ギリシャ哲学からキリスト教への移行は、一神教崇拝に多神教崇拝が、連続的にではないが、先行すると云うことを宗教史一般についてのアナロジーとして認めている。本稿で高度な宗教的昂揚と呼ぶところのものは、

当然、Palmyra の場合に知られる通り、或る一神教崇拝的なものへの接近を含んでいる。

(4) 西紀一四世紀のイスラム教徒たちもそう考えていたことは、イブン・バットゥータ（前嶋信次教授訳、角川文庫版、四八頁）に「シリアにおける最後の町」とあるので分る。

(5) Cf., A. H. M. Jones, The Cities of the Eastern Roman Provinces, 1937, p. 228. Jones は東西交易ルート上のシリア都市を(イ)沙漠周辺の隊商都市、(ロ)地中海岸の港町、(ハ)両地をつなぐ山間の中継地集落の三つに分けた。

(6) 「史学」33-3・4；同 35-2・3；「オリエント」5-1 等。

(7) G. A. Cooke, A Text-Book of North-Semitic Inscriptions: Moabite, Hebrew, Phoenician, Aramaic, Nabataean, Palmyrene, Jewish, 1903, p. 217 (No. 79-B. C. 1) 参照（「ナバテア人とサラメア人の神 Dûshara の聖なる場所」l. 9)。Cf., F. Hommel, Ethnographie und Geographie des alten Orients, Handbuch der Altertumswissenschaft, III, i, l, 1926, S. 593. 又、J. Cantineau, Le Nabatéen II (1932), p. 28f. (II) にもサラメア人が出る (l. 4)。

(8) Stephanus Byzantinus, art. Dusares (F. Cumont, Pauly-Wissowas Realencyclopädie der Klassischen Altertumswissenschaft, Art. Dusares, col. 1866, Cf., A. Grohmann, ibid., Art. Nabataioi, col. 1454.) 後出註10参照。

(9) 「史学」35-2・3, pp. 210-211参照。

(10) これ等のテキストは、J. H. Mordtmann, Dusares bei Epiphanius, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 29 (1876), S. 103-104 に出ている。そのうち、Hesychius (s. v. Dusares) は Augustus 帝時代の Isidorus Charachenus を引用している。一方、Suidas (s. v. Theusáres) は Dūsarā をこじつけによってギリシア語と看做し、Theòs Arēs と改め、又 Suidas を利用した Cedrenus は更にギリシア語 Thēsaurós Theos（「宝の神」）としてしまった。

(11) J. H. Mordtmann, ibid., S. 102; F. Baethgen, Beiträge zur Semitischen Religionsgeschichte, der Gott Israels und die Götter der Heiden, 1888, S. 94-95; G. Rösch, Das Synkretische Weihnachtsfest zu Petra, eine Studie zur Arabischen Religionsgeschichte, *ZDMG*, 38

(1884), S. 645.

(12) Du なる語の持つ意味については、「史学」35-2・3, p. 214 参照。

(13) Th. Nöldeke, Encyclopedia of Religion and Ethics, art. Arabs, 663a.

(14) Apud Cooke, op. cit., p. 215-.

(15) G. L. Robinson, The Sarcophagus of an Ancient Civilization; Petra, Edom and The Edomites, 1930, p. 20.

(16) G. L. Robinson, op. cit., p. 19, n. 1.

(17) M. A. Levy, *ZDMG*, 14 (1860), S. 465-6.

(18) A. Grohmann, op. cit., col. 1465.

(19) 旧約聖書(申命記 II-1)の Seir (Se'îr) 山と Shara とはほぼ同一の地帯を指すと考えられるが、両者は語源的には異ると云う説 (Robinson, op. cit., p. 20: Hommel, op. cit., S. 547 und Anm. 3) もあり同一視する説 (G. Horsefield and Agnes Conway, Historical and Topographical Notes on Edom: With an Account of the First Excavations at Petra, *The Geographical Journal*, 76 (No. 5, 1930), p. 371; cf., p. 374) もある。Cf., R. Dussaud, La pénétration des Arabes en Syrie avant l'Islam, 1955, p. 30; Cantineau, op. cit., II, p. 22 f.

(20) D. Sourdel, Les cultes du Hauran à l'époque romaine, 1952, p. 60

(21) F. Cumont, Pauly-Wissowa, Art. Dusares, col. 1865. その他に、例えば旧約聖書中の Abraham の妻 Sarai と結びつける等の異説については、E. Meyer, W. H. Roschers Ausführliches Lexikon der Griechischen und Römische Mythologie, Art. Dusares, col 1206 参照

(22) Cantineu, op. cit., II, p. 22 f.; Cooke, op. cit., p. 234, No. 101.

(23) E. Littmann, Syria, Publications of the Princeton Univ. Archaeological Expeditions to Syria in 1904-1905 and 1909, Div. III, Sect. A, p. 137, No. 238 (=Div. IV, Sect. A, pp. 34f., No. 38); Cantineau, op. cit., I, p. 23; Cf., R. Dussaud, Les Arabes en Syrie evant l'Islam, 1907, p. 167.

(24) Cantineau, II, op. cit., p. 24.

(25) Cantineau, op. cit., II, p. 36; Cooke, op. cit., p.238, No. 92.

(26) Cf., Cooke, op. cit., p. 239; Grohmann, op. cit., col. 1466. その他、Hommel は al-ágarru から "der Hellschimmeronde" と訳し、Littmann は al-ġarī (石偶) に由来すると考えた。

(27) D. Sourdel, op. cit., p. 60.

(28) R. Dussaud, La pénétration, p. 30 et p. 45.

(29) A'rā と結びつけずに Orotalt を説明しようとする諸説については、F. Hommel, op. cit., S. 719, Anm. 4 参照 (E. Meyer や Blau はシナイ半島の一地方 (現在 'Ain Gharandel) のアラビア系部族 Garindaioi (Strabo, XVI, iv, 18; cf., Hommel, S 672 u. Anm. 3) の神とし、F. Cumont は Orotalt を Obt-alt と直し、Abd ('Obed)-Lât 即ち、Allat 女神の「しもべ」と云う意味と考え、Hommel 自身ははじめは Oropal と直し、Al-Opal 即ち Al-Hubal (アラビアの神 Hubal) に他ならないとした)。

(30) Dusaud, Les Arabes, p. 167; cf., G. A. Cooke, op. cit., p. 239; Cantineau, op. cit., II, p. 66.

(31) Cf., Hommel, op. cit., S. 719–720; G. A. Cooke, Encyclopedia of Religion and Ethics, art. Nabataeans, col. 121.

(32) 「史学」34–3•4, p. 167.

(33) G. Horsefield, op. cit., pp. 371–373.

(34) G. L. Robinson, op. cit., p. 23, esp. Chapt. XIV, The Land of Edom (pp. 175–203).

(35) M. A. Murray and J. C. Ellis, A Street in Petra, 1940, pp. 23–25.

(36) Robinson (op. cit., p. 201) の挙げる主要な泉地として、'Ain 'Arus, 'Ain Hasb' 'Ain al-weibeh, 'Ain Budeirah, 'Ain Tayyibeh (以上、アラバ河)、'Ain Mūsa, Esh-Shobek, Dhânah, El Buseirah, El Buseirah, Tafile (以上、東側高地)、Ain Kadees, Ain Kudeirat, 'Ain Mahāra, 'Ain al-Kattâr, 'Ain al-Ghazalet, 'Ain al-Ikseib, 'Ain al-Ibweira (以上、西側高地)。

(37) J. Cantineau, op. cit., II, p. 29–30.

(38) S. A. Cook, op. cit., col. 122.

(39) J. Cantineau, op. cit., II, p. 29 (Guidi の論文 Revue biblique, 1910, p. 421–426 は筆者未見)。

(40) Grohmann, op. cit., col. 1465. その他にも J. Noiville (Le culte de l'étoile du matin chez les Arabes preislamiques et la fête de l'Epiphane, *Hesperis* VIII (1928), p 363–384.—筆者未見) が金星説を唱えた。cf., Sourdel, op., cit., p. 65.

(41) W. H. Waddington, Inscriptions grecques te latines de la Śyrie (1870), No. 2312=J. H. Mordtmann, op, cit., S. 105; cf., F. Cumont, Pauly-Wissowa, Art. Dusares, col. 1867. E. Meyer, Roscher, op. cit., col. 1205 但しテキストは Sourdel (op. cit., p. 61) によつて改訂されたものを訳した。

(42) Sourdel, op. cit., p. 53–54; p. 68. この書の書評を書いた Ernest Will (*Syria*, 30 (1953), p. 152) も Sourdel のの見解を支持しているようである。

(43) Sourdel, op. cit., p. 53.

(44) G. L. Robinson, op. cit., pp. 406 ff; p. 131.

(45) テキストは上出の註10参照。

(46) Cf., R. Dussaud, La Pénétration, p. 46, n. 1.

(47) B. V. Head, Historia Numorum, 1911, p. 812.

(48) Wadington, op. cit., No. 2370 apud Cumont, Pauly-Wissowa, Art. Dusaria, col. 1867.

(49) Sourdel, op. cit., p. 63 (=Damascius, Patrogia Graeca, p. 103, col. 1285–1290).

(50) B. V. Head, op, cit., p. 811.

(51) Sourdel, op. cit., p. 61; Cumont, Pauly-Wissowa, Art. Dusares, col. 1866.

(52) H. C. Butler, Syria, Publications of the Princeton Univ. Archaeological Expeditions to Syria, Div. II, Sect. A, Part 6, 1916, pp. 365–385; cf., E. Littmann, Ruinenstätten und Schriftdenkmähler Syriens, 1916, S. 25–26.

(53) Cf., Sourdel, op. cit., p. 63–65. その他に、坐女と Satyros をともなつた Dionysos のフリーズも見つかつている。

(54) M. A. Murray and J. C. Ellis, op. cit., p. 15, 21. しかし、最近の P. C. Hammond (A Classification of Nabataean Fine Ware, *American Journal of Archeology*, 66. (1962), p. 173) の説では祭祀用ではなく単なる贅沢品であるとしている。

(55) 註6参照。

(56) Robinson, op. cit., p. 23; Murray and Ellis, op. cit., p. 23; p. 25; Horsefield, op. cit., p. 383; p. 373.

(57) Sourdel, op. cit., p. 9.

(58) de Saulcy, Numismatique de la Terre Sainte, 1878, p. 376–377. (筆者未見。 Cf., Dussaud, La Pénétration, p. 42)

(59) Dussaud, Notes de mythologie syrienne, 1904.

(筆者未見。Chf., ibid., La pénétration, p. 42.)

(60) Sourdel. op. cit., p. 62.

(61) C. R. Morey, Dusares and the Coin-types of Bostra, Syria, Publications of the Princeton Univ. Archaeological Expeditions to Syria, Div. II. Sect. A, Appendix, pp. xxvii–xxxv; Cf., Cooke, op. cit., p. 219.

(62) Cf., R. A. Macalister, A Century of Excavation in Palestine, 1925, pp. 272–277.

(63) Horsefield, op. cit., pp. 375f.

(64) Ibid., pp. 386f.

(65) Murray and Ellis, op. cit., p. 5; p. 10.

(66) Robinson, op. cit., pp. 80f; 85. その他の例については Horsefield, op. cit., p. 286 参照。

(67) Robinson, op. cit., p. 120; cf., Crawford apud ibid., p. 297.

(68) Ibid., p. 128; Horsefield, op. cit., p. 386.

(69) テキストは J. H. Mordtmann, op. cit., S. 104. その他に、Maximus Tyrius (Diss., VIII, 5) 及び Clemens Alexandrinus (=Arnobius, Adversus gentes, VI, 11) にアラビア人の方形の石神とその祭祀について言及がある。

(70) Krehl, Religion der Araber, S. 42 (筆者未見。Cf., Baethgen, op. cit., S. 95–96.)

(71) G. L. Robinson, op. cit., p. 406; G.A. Smith, Historical Geography of the Holy Land, p. 628 (筆者未見…… Robinson による); F. Baethgen, op. cit, S. 95; C. R. Morey, op. cit.,pp. xxx–xxxi.

(72) F. Cumont, Pauly-Wissowa, Art. Dusares, col. 1867; ibid., Mithra et Dusarès, *Revue de l'Histoire des religions*, 78 (1918), p. 209–21; E. Meyer, Roscher, Art. Dusares, col. 1206–1207. 尚 Wellhausen の説については、G. L. Robinson, op. cit., p. 408.

(73) E. Will, *Syria*, 30(1953), p. 152.